

## 【大会印象記】

東京国際大学 高橋 明善

第46回村研大会は埼玉県嵐山町の国立婦人教育会館で開催された。村研大会には旅行、温泉、宿泊を通してゲマインシャフトな雰囲気を期待して集まる人も多いと思う。東京近郊なので、そうした雰囲気は味わえないかと思っていたが、会場の教育会館は、女性が家事を忘れて参加できるように日帰りのできない都心から離れたところに作られたということであり、農村と自然を味わうこともできだし、村研大会に出席したという実感を十分にもつことができた。効率・営利などの目的をもたないアソシエーションとしての学会を支えるのは、研究者間の人間のつながりのもたらすゲマインシャフト性だと思う。例年以上に参加者も多く、準備された主催者、事務局の努力に感謝したい。

大会前日のエクスカーションは木工芸の里、「手打ちそば」、みかん、山菜、森と水の自然などをテーマに村興しをはかっている都幾川村の周遊であった。地元の方々の熱心な説明、会員によるそばの手打ち、古代の創建になる慈光寺の住職の洒脱な語りと振る舞い

など記憶に残るものであった。ただ、山には杉、ひのきが全面的に植林されたまま間伐もされず放置されており、観光に訪れる都会人は花粉症に悩まされるのではないか、山菜やきのことりや広葉樹の山を歩く楽しみも少ないのでないのではないか、地元の木材資源によらず輸入材にたよった木工芸とは何とかならないかとか、村づくりのアンバランスな面も印象に残った。

大会第一日目に①地域資源と地域社会、②アジアと農村社会、③女性の役割と農村社会、④合理者福祉と農村社会、の四つのセッションでの10の報告と、⑤国際交流についてのビジネスセッションの報告討論が行われた。

①のセッションでは浜田健司氏が過疎地における集落営農、法人、余力ある兼業農家の三者による農地管理のシステムの在り方を、田中一宏氏がレタス生産畑の地力保全に村落の共有地が重要な役割を果たしてきたこと、客土用土壤の共有地からの掠奪的採土が土壤資源の不足化をもたらしている事例を報告した。

②のセッションでは金科哲氏は日本と韓国の村落を比較し、日本の村落の地縁性、タイトな組織性、水平的結合性、韓国の血縁性、柔軟性、垂直的結合性などを比較し、システム化された日本の住民組織に対し、韓国の方に内発的発展可能性が強いと論じた。黒柳晴夫氏はジャワにおける伝統的な助合を通しての「貧困の共有」に代わる新しい形態の一種の無人組織シンパンピンジャムについて報告した。貨幣経済が浸透する中で、古いものの弛緩・解体・新しい連帯の創出を論じている。兩人はいずれも内発的な住民組織の芽を探ろうとしている。安秉坤氏は日本の潜在的直系家族と韓国の分居的直系家族という注目すべき概念を提出した。国際比較論は、日本農村の個性を探るのに役立つと思う。

③のセッションでは、永野由紀子氏の農村女性の自立化と原珠里氏の女性の社会的ネットワークに関する報告が行われた。永野氏の報告は膨大なレジュメに基づくものであり、別途に論文化されると思うが、記憶に残るのは、生活実態としていえ個人が両立矛盾せず統一しているという視点が語られていたことである。この点はもっとつきつめなければならぬように思う。同じ庄内でも、結婚にあたって、女性には農業をさせないというのが条件になっているところもあるし、実際庄内の女性の農業就業率は全国的にも低いのである。かつて、農村の社会関係はいえを単位として、村落の中に制限されていた。原氏の報告は、現在いえと村の拘束を離れて自立化してきた個人としての女性の社会的ネットワークの研究である。しかし、なお、それは所与と選択の間をゆれているとされている。こうしたネットワーク形成がもたらす女性の自立化の研究の重要性を再確認した。

第四セッションでの宗金文氏の柳田国男の農村福祉論の研究は中国社会を念頭においたものであり、柳田理論を中国にひきつけて考えた場合にどうなるかを考えることによって新しい視点からの、日本、中国の農村研究の新しい射程が開けることを期待したい。相川良彦氏の報告は農村女性作家の作品・日誌による意識構造分析を通しての農村女性論である。生活史の中から、構造論や理論の形式に包み込まれない流動・生成する生活を汲みとろうとするのは同氏の年来の研究手法の一つである。私の個人的印象だが、日本の農村女性史は、村研においては意外とストックとして蓄積されていないようだ。今後の蓄積を望みたい。叶堂隆三氏の高齢者福祉報告は、シンポジウムテーマにもかかわる。松本市における地域での住民福祉のための活動の詳細な報告をふまえたものである。町会を基礎とした住民や婦人の福祉活動を中心とした実態が報告された。現実発掘は貴重であるが、

農村農家における固有の福祉問題の発掘が今後求められるであろう。 第二日は共通テーマセッションとして「農村の高齢化と地域福祉」が取り上げられ、6本の報告が行われた。 今後、環境、食糧、国際化、女性などとともに福祉は農村研究のキーワードになるだろう。 それは、農村の生活と社会の全体にかかわり、農村社会の構造と変動研究そのものともなりうる。 その意味で今回の企画は有意義であった。 私は研究が単なるシステムや構造の研究をこえて生活世界の主体的形成論につらなることを期待したい。

福祉業務は国の機関委任事務でなくなり地方自治体の仕事として実施されることになった。 介護保険制度の実施は目前に迫っているが、具体的にはどう実施されるか混迷状態にある。

本城昇氏の報告は一般的なシステムの紹介であったが、それが、実際は医療保険対策の側面をもっていること、医療系統中心の患者囲い込みを進めることもあるというような重要な問題指摘もあった。 池本良政氏は農村における福祉労働力と農業労働力の競合問題を論じたことに新鮮な印象を残した。 杉岡直人氏は過疎地の多い北海道の農村における介護問題の所在について量的データをもとに報告した。 そこでは、3分の2に同居の後継者がいないこと、高齢化によって女性の農業からの引退が保障されていないこと、そこに生ずる健康不安などの問題を指摘し、在宅福祉に加えて施設福祉の重要性を指摘した。 藤崎宏氏の報告は叶堂氏と同じく松本市における在宅ホームヘルプサービスに関する報告である。 市の制度展開の経過とサービス対象者の個別事例の詳細な報告が行われた。 後者のような研究を積み重ね、問題発掘が多様に行われなければならない研究段階だと思う。 東京でいくつかの研究会に出席したが、人間不在の議論が多いというのも実感であるからである。 最後の関寛裕之氏は専門医師の実践的立場からの専門職のネットワーキングによる地域医療と介護の結合について論じた。 ただ、農村は専門家が少ないので、医療福祉センター型となるだろうということであったが、農村における医療福祉問題には論ずることが多くあることを実感した。

討論の中でのいくつかの感想を述べておく。 ①徳野貞雄氏の「PPK=ピンピン・コロリ」が一番だという発言は面白かった。 介護・医療だけでなく、高齢者の健康と生きがい、労働を前向きで求めるのも重要な研究視点であろう。 ②現在の厚生省の施策は国民の権利要求に答えるものではなく措置政策である。 権利要求に答える方向の福祉政策は求められねばならない。 ③痴呆性や寝たきりなど高度障害者の福祉は施設福祉が基本である。 現在、病院、老人保健施設だけでなく、特別養護老人ホームも期限つきになる方向だという。 在宅福祉によって、家族の負担に依存するのでは、徳に女性は浮かばれないだろう。 民間施設に依存すれば過大な費用がかかる。 家族に迷惑をかけず施設に安住終焉の場所を求めたいのも高齢者の多数派である。 施設福祉が基本で、それを家族、地域が補完すると考えるべきではないか。 厚生省は医療・福祉負担軽減が軸で、考え方が逆立ちしているように思う。

(taka-aki@msg.biglobe.ne.jp)